

2020 年度 FD 活動の取組み

1. FD 研修会(分科会)

今年度のFD研修会については、新型コロナの感染拡大により、原則全ての授業がオンラインによる実施となったことを受け、「オンライン授業の課題」をテーマに実施することとなった。

学部と大学院では授業の進め方や学生の考え方、感じ方が異なるため、まずは、全学生を対象として実施した「オンライン授業に関するアンケート」結果を参考に、各学部・研究科内でオンライン授業の課題を顕在化させることや、改善に向けてどのように取り組むか意見交換することを目的として2020年9月10日(木)にFD研修会(分科会)を実施した。

各学部・研究科にて実施したFD研修会(分科会)での議論を踏まえ、そこで挙げた課題を集約し、全学的に共有すること、また、それらの課題をどのように解決し、授業改善に繋げられるか検討することを目的として、外部講師を招いて2020年10月29日(木)にFD研修会(全体会)を実施した。研修会は分科会、全体会ともに新型コロナの感染状況を鑑み、ZOOMによるオンライン形式で実施した。

各学部・研究科にて実施したFD研修会(分科会)及びFD研修会(全体会)の詳細は以下の通りである。

1-1. 経済学部および経済学研究科

司会:大野 早苗(経済学部長)

日時:2020年9月10日(木) 17時30分~18時00分

参加者:31名

■オンライン授業の設計・実施に関する問題・改善点

- (1) 学生もそうだが、教員もオンライン授業になれていない。
- (2) アンケート結果から学生は課題が多いと感じている。
- (3) 客観的評価のための期末試験ができない。

■上記に対する改善策や解決案(番号は上記と連動している)

- (1) 技術的方法論だけでなく、実施にあたっての留意点やノウハウといった面でのインストラクションが授業の質向上のためであっても良いのではないか。
- (2) 単位には自習時間がセットになっていることを周知しつつも、課題に対して教員からのフィードバックが何より重要ではないか。
- (3) 評価にあたって先生方が工夫していることなど、FD研修会や分科会などの情報交換の場があっても良いのではないか。

(文責:今井 英彦)

1-2. 人文学部

司会: 上向貫志 (人文学部長)

日時: 2020年9月10日(木) 16時30分～17時00分

参加者: 38名

■オンライン授業の設計・実施に関する問題・改善点

(1) ZOOM について

- 機能に制限があるため授業形式に大幅な制限が出てしまう。
- 教室ごとにアカウントが割り当てられているため使用可能な時間帯が固定されてしまい、延長できず退出させられてしまう。
- 大学のアカウントを使用している教員が個人のアカウントを使用している教員と同じ条件で授業評価されてしまい不平等になってしまう。

(2) 3Sについて

- 掲示機能を使わないと履修者全員に連絡ができないのにもかかわらず、教務課の承認が必要のため、休暇期間中など時間がかかってしまう。

(3) 授業形式について

- 後学期からの授業形式の周知・決定が遅いため、学生から遠隔授業状況について尋ねられた場合、説明できないため迅速に大学としての方針を決定してもらう必要がある。
- 授業実施の時間帯次第では録画が必要となる場合、全ての授業を録画するというのは、抵抗がある教員もいる。

■上記に対する改善策や解決案

(1) ZOOM について

- 教室にIDを充てず、個人に与えれば解決する問題ではないか。
- 設定等に対応できる問題も多いので、そちらも具体的な必要項目を挙げられると良い。具体的な必要機能を何らかの方法で集約することはできないか検討する必要がある。

(2) 3Sについて

- 今回だけに関わらず例年長期休暇期間等に生じている問題であるため、なにか解決策はないか検討する必要がある。

(3) 授業形式について

- 遠隔授業化の状況については、学長から統一見解を伝えるよう学部長から伝達していただき、迅速に対応してもらうよう依頼する。
- 録画の問題については、教員個別に録画「可・不可」を決められる設定にできないか検討する必要がある。

(文責: 小森 真樹)

1-3. 社会学部

司会:内藤 暁子 (FD 委員、社会学部教授)

日時:2020 年9月 10 日(木) 14 時 40 分~15 時 45 分

参加者:21 名

■オンライン授業の設計・実施に関する問題・改善点

- 1 課題の量に関して
- 2 課題の受けとりに関して
- 3 課題のフィードバックに関して

■上記に対する改善策や解決案

1 課題の量に関して

- (1) 課題にかける時間の目安を明確にする。

たとえば、対面授業のコメントペーパーのように、全体の作業量を授業時間内(90 分)におさめる形にすればいい、という意見に対しては、課題に取り組む時間として授業時間を短縮することになるので、注意が必要である、という意見がみられた(授業時間を単純に短縮化することにも学生からの「批判」がみられるため)。ただし、そういった意見を回避する意味合いも含め、あらかじめ、授業の構成時間を明示することの重要性が指摘された。

- (2) 課題に提出する文字数等の目安を明確にする。

- (3) 課題の位置づけを明確にする。

軽めのコメントペーパー扱い/ミニレポート扱い等を明確にする。

2 課題の受けとりに関して

社会学部では、課題の受け取りに関するトラブルは報告されなかった(課題提出を個人メール宛にする教員がいなかった)ため、特に議論はしなかった。

3 課題のフィードバックに関して

- (1) 受講生数との兼ね合いで難しい問題である。受講生が多い場合、負担がおおきいため、全員にコメントをつけることは難しい。
- (2) できるだけ、個々人にコメントを返している。
- (3) できるだけ、評価点数を入れている。
- (4) 翌週に特徴的なコメントを幾つかを紹介している。他の受講生の考えを知ることができると好評である。
- (5) 授業資料のパワーポイントの中で、課題に対する対応の一部を紹介したり、質問等にもこたえることで、復習時間としても有効である。

4 その他

- ゼミにおける Zoom のブレイクタイム利用に関してゼミなどの授業時、Zoom のブレイクタイムを有効活用できる具体例が紹介された。

ブレイクタイムの時間を使って、チャットでの質問タイムを設け、教員が質問をとりあげてこたえと、疑問点の解決となるだけでなく、新たな意見交換がさらに可能となる。

(文責:内藤 暁子)

1-4. 人文科学研究科

司会:木元 豊 (FD 委員、人文科学研究科委員長)

日時:2020年9月10日(木) 14時40分~15時00分

参加者:46名

2020年8月1日から8月10日にかけて実施した「オンライン授業にかかるアンケート」においては、大学院生の回答率が低く、議論のベースとするデータを抽出することが困難であったことから、本研修会では、2020年7月6日から7月17日にかけて実施した「2020年度前学期授業評価アンケート」の【Ⅲ】オンライン授業に関する自由記述項目に基づいて、議論した。

上記の項目に基づく限り、大学院ではオンライン授業に対する満足度が総じて高いと判断できる。オンライン授業を積極的評価している回答が6/28=21%、オンライン授業でもあまり大きな問題はない、利点もあるとしている回答が15/28=54%で、実に75%がどちらかと言えば肯定的に捉えている。残りの15%にしても、オンライン授業に対して明確に否定的な回答はない。本研修会では、このことをまず確認した上で、それでもなおオンライン授業において困った点として、大学院生が挙げている事柄を三つ取り上げた。なお、大学院生も学部生と同様に Wi-Fi やパソコン等機器関連のトラブルを問題視していたが、この点は本研修会のテーマにはそぐわないため、取り上げなかった。

まず、オンライン授業では二時限連続など長時間授業になると集中力が続かなくなるという意見に関して、議論した。オンライン授業においては、教員側は授業を行うことに集中してしまう傾向があり、意識的にアイスブレイキングなどを行い、休憩を挟む必要があること、また、休憩前後で授業の内容や方法を意図的に変えるなど、授業のメリハリを付ける工夫が対面授業以上に必要であることが確認された。時間割調整によって、二時限連続となるような授業配置を避けた方が良いのではないかという意見も示された。

次に、Zoom 教室の利用時間制限に起因する問題を検討した。アンケートでは、時間制限を意識するあまり十分に意見が述べられないということや授業後の意見交換ができないということが問題視されていた。後学期から Zoom 教室のアカウントが1教室2アカウントとなったことで、時間制限の問題はある程度解消されるのではないかという意見が出された。しかし、Zoom 教室は教員がホストを努めなければならず、授業後に学生のみで話し合う時間を持たせたりすることは依然として難しいということも確認された。この問題は Zoom 教室ならではの問題であり、教員個人に Zoom アカウントを配付すれば解決するのではないかという意見もあった。

最後に、オンライン授業ではディスカッションの際に他の履修者と同時に発言してしまうなど、発話のタイミングが取りにくいという指摘を取り上げた。これに関しては、大学院の授業は少人数で行うので、学生の了解を取って、ビデオオンで授業を実施し、発言の際に手を挙げて貰えば良いのではないかという意見が示された。

限られた時間ではあったが、大学院における授業に特化する形で、オンライン授業の問題点に関して議論できたことは、とりわけ 2020 年度後学期の人文科学研究科の授業運営にとって有意義であったと考えられる。

(文責:木元 豊)

2. FD 研修会(全体会)「オンライン授業のデザインと改善に向けて」

講師:村上 正行教授(大阪大学 全学教育推進機構 教育学習支援部 教授)

司会:内藤 暁子(FD 委員、社会学部教授)

日時:2020 年 10 月 29 日(木) 14 時 40 分~16 時 10 分

参加者:106 名

研修会の内容は、以下の5つのテーマで構成された。

- ・オンライン授業の設計・ポイント
- ・授業実践の紹介
- ・オンライン授業における著作権について
- ・オンライン授業の評価
- ・対面授業とオンライン授業の組み合わせなど

村上教授の講演は教育工学の知見と、オンライン授業におけるノウハウや体験談に基づき、示唆に富むものであった。対面授業であっても、オンライン授業であっても、重要なポイントはあまり変わらず、学習目標に基づいて授業を設計することである、という指摘は頷ける。授業のオンライン化にともない、最新技術の導入や作業量に意識が向かいがちであるが、技術的に無理なことをせずとも、学生をリアルに巻きこむこと等で魅力ある教育実践が可能である、ということを改めて具体的に提示していただいた。

また、オンライン授業における著作権については、授業目的公衆送信補償金制度や、オンライン授業で想定される著作権問題について、具体例をあげて説明された。

加えて、オンライン授業での学習評価、つまり、何らかの「テスト」をオンラインで行う際の技術や方法、問題や時間の工夫等が紹介されるとともに、ポストコロナ時代の授業形態として、対面授業とオンライン授業の組み合わせが例示された。すなわち、1つの授業で対面とオンラインを組み合わせる3つの方法、ブレンディッド型授業、ハイブリッド型授業、ハイフレックス型授業である。とはいえ、最後に指摘された重要なポイントは、従来通り、授業目標であり、学生の立場を考え学生の声に耳を傾けることや、教員同士の情報共有を行うことでもあった。

本研修会後に実施した参加者アンケートにおける自由意見として、以下のようなものがみられた。

- ・ オンライン授業について日頃考えているようなことをまとめていただいて、考えがすっきりした
- ・ 自分が行った今年度授業を振り返って反省するうえで大変参考になった。例年のような厳格な試験を実施できないことなど、未だに正解にたどり着けていない問題点も多々残っているが、ヒントを頂けた気がする
- ・ 授業目標など従来の授業と変わらない点や、具体的な工夫などを伺うことができた
- ・ どのように今後、対面やオンラインをうまく組み合わせて行っていくべきか、アイデアも含めて共有でき、柔軟に授業設計を考えていくよい機会になった
- ・ コロナ禍において対面とオンラインをどう組み合わせていくか難しい問題だが、考える材料をいただけたと思う。自分の授業設計については、できているところとできていないところをポイントごとに確認するよい機会となった。
- ・ 100名以上の受講者がいる講義と少人数のゼミナールではオンライン授業の活用方法が大きく違う。そうした区別を踏まえた議論があるとより良かった。
- ・ 授業改善のため「課題の量の調整方法」、「学生への物的・心理的・身体的な配慮事項」といった具体的な話や、「大学全体でどのような方針・活動を具体的に行えばよいのか」といった組織的な話も聞きたかった。
- ・ 非常に参考になった部分があるのと同時に、インストラクショナル・デザインにおける教育効果と

教育効率、および継続動機に関する研修会を実施していただきたいと思に至った。また、学生に発表を促す際に、研修会では事前に録音して提出させる旨、報告されていたが、その際の学生側の「負担」を大学側がどのように補填すべきか等、具体的な対応策を個人的には知りたかった。

- ・ 著作権に関する授業運営上の武蔵大学の取り組みと考え方についての指針を、事例を交えて、教員に提示してほしい。

以上のように、今後の授業設計を考えるうえで参考になったという意見が多く見られ、アンケート結果としても、「非常に参考になった」と「参考になった」を合計すると85%を超えた。

2020 年度 FD 研修会受講者アンケート結果

本日の研修内容の感想をお聞かせください

非常に参考になった	34 名	38.6%
参考になった	48 名	54.5%
どちらともいえない	6 名	6.8%
参考にならなかった	0 名	0%
まったく参考にならなかった	0 名	0%
合計	88 名	100%

(文責:内藤 暁子)

3. 教員 FD 研修報告

<研修の概要>

名称:「令和2年度オンラインFD推進ワークショップ」

日程:2020年12月13日(日)14時~17時

開催方式:オンライン(Web会議システムZoom)

主催:一般社団法人 日本私立大学連盟

参加者:土屋直樹(教務部長、経済学部教授)

<研修の趣旨>

新型コロナへの対応開始からおよそ1年を迎えるときに、来年度以降の大学教育のあり方について議論を深めることを目的として、3つのテーマ別に、加盟大学間で情報交換を行う。

<主なプログラム>

- 趣旨説明
- グループ討議(A、B、Cのテーマ別に、グループを7つに分けて実施)
- 全体討議

<各テーマの概要>

- テーマA:オンライン授業の現状と課題について

「今年度、特に春学期(前学期)に各大学で行われたオンライン授業の方法やそこでの課題の出し方、また、成績評価の方法等について、各大学での実情と課題を取り上げます。具体的にはZoomなどによるリアルタイム配信やVOD、またLMSを活用した取り組みの他、反転授業などの先進的な取り組み事例、学生や教職員に対するICTサポートについて情報共有します。さらにそれらの授業に対する学生からの反応、評価についても現状を把握し、課題を共有します。」

- テーマB:学生のコミュニティ形成や学習支援・生活支援の方策について

「オンライン授業一色になった春学期(前学期)、学生、特に新生に対する大学への帰属意識、コミュニティ形成を支援するための、各大学での取り組みについて情報共有します。また、学生-教職員間や学生同士のコミュニケーションを支援する方法、さらには図書館や実験室を含め、教員への質問・相談に来られない学生の学習支援、アルバイト等ができない学生の生活支援、将来に不安を持つ学生の就職支援についても現状を把握し、課題を共有します。」

- テーマC:対面授業等再開にかかる取り組みと配慮について

「秋学期(後学期)、一部対面授業を再開した各大学において、どのような基準で対面授業を実施して、オンライン授業と区別したのか、また、キャンパスに滞留する学生の感染予防や、既往症等の関係でどうしてもキャンパスに来ることができない学生への教育的配慮をどのように行っているのかについて情報共有します。また、実験実習系授業や演習など対面授業でなければ実施困難な授業について、三密を避けるために各大学が工夫している点などについても現状を把握し、課題を共有します。」

<討議の概要と得られた知見など>

参加したグループ討議のテーマは、「テーマA:オンライン授業の現状と課題について」でした。7名(7校)の参加者がそれぞれ、事前に提出した資料をもとに、取り組んでいる内容、問題、課題について述べ、それに関する質疑応答が行われました。時間が限られていたため(80分)、具体的、詳細な意見交換、情報共有は難しかったと思いますが、いくつかの論点に関して、知見を広げることができました(以下、箇条書きで示します)。

1. ICTシステム等の問題

- ・サーバーダウンやパケ死を防ぐシステム利用(授業利用)の方法の検討が必要
- ・地域によっては電波が入りにくい学生もいる⇒Wi-Fiの貸出等の対応も必要
- ・ツールを統一してほしいという学生の要望がある

2. 遠隔授業に対する学生の捉え方

- ・動画配信型は対面授業と変わらないぐらいの満足度(復習しやすいことなどの理由)
- ・同時双方向型の授業が連続するとしんどいという意見(そうした授業が多くあるなかでオンデマンド型があると「オアシス」のように感じる)
- ・資料配信型(自主学習型)は不満が大きい
- ・質問がしにくい、質問してもレスポンスが遅い(ない)という不満も少なくない
- ・文字の方が質問しやすい学生、匿名性を担保してほしい学生もいる
- ・通学時間が長い学生はオンラインにとくに肯定的である

3. 遠隔授業に対する教員の捉え方

- ・ITに弱い教員も、少しずつレベルアップし、全体として授業力の向上に意識も向き始めている

4. これからの問題

- ・ハイフレックス型の授業を行うか
⇒その場合、教室環境整備が必要で、それがないと授業準備が大変
- ・オンラインは学修成果とどう結びつくのか
⇒成績に差はないか、むしろ上がっている(ただし、上位成績者と下位成績者の格差が広がる)
※アクティブラーニング(協同学習)要素が減ったことも原因か

次いで、全体討議が行われ、7グループから討議での内容の紹介がそれぞれ行われました。時間の制約のため(50分)、質疑応答、意見交換はほとんど出来なかったわけですが、ここでも共通する課題について、知見を広げることができたと思っています。この研修の成果を今後の職務に活かしていきたいと考えています。

以上

4. 教務 FD

「2022 年度カリキュラムのナンバリングおよびカリキュラム・マトリックスの策定」と「初年次教育の見直し」について

教務部長 土屋 直樹

2020 年度の教務 FD では、2019 年度までの成果をふまえ、二つの取り組みを進めた。

2019 年度は、中央教育審議会「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」の内容に基づき、2011 年度/2017 年度カリキュラム(以下「現行カリキュラム」)のカリキュラム・マトリックスの再検討と実質化に取り組んだ。

2020 年度は、2022 年度カリキュラムがおおむね決定したことを受け、2022 年度カリキュラムのナンバリングとカリキュラム・マトリックスについて、全体の方針を決定し、各学部等での検討・策定を行った。これにより、現行カリキュラムに続いて学修成果の可視化をいっそう進め、学生の自主的な学修を支援することを目指す。また、かねてより進めてきた初年次教育の見直しでは、学部または学科単位での初年次ゼミナール等の授業およびシラバス内容の統一に向けて、さらなる検討・決定をおこなった。

● 2022 年度カリキュラムのナンバリングおよびカリキュラム・マトリックスの作成

1. 検討スケジュール

2022 年度カリキュラムにおいても、新学部を含む全学部共通のルールでナンバリングコードおよびカリキュラム・マトリックスを策定するため、2020 年 11 月より方針の検討を開始した。検討の初回として、新学部のアカデミックダイレクター就任予定者を出席者に含む、拡大教務部委員会を開催した。その後、各学部等の検討を経て、2021 年1月の教務部委員会でそれぞれの方針を決定した。決定した方針は、2021 年2月の各学部教授会にて内容の確認がなされた。続いてこの方針に基づき、各学部等でナンバリングコードおよびカリキュラム・マトリックスの策定を行い、2021 年3月の教務部委員会で報告された。なお、ナンバリングコードとカリキュラム・マトリックスの検討に先立って、大学および各学部のディプロマ・ポリシーの検討がなされ、その結果を受けて策定が進められた。

2. ナンバリング

ナンバリングとは、本学で開講している科目に番号付けを行い、科目の分野、履修可能年次、履修順序などを表したものである。学生は、授業を履修するにあたり、その科目がどのような水準か、どのような順番で科目を選択すればいいかを判断するときに活用できる。

議論の結果、2021 年1月の教務部委員会にて以下を決定した。

- 専門分野コードを3つ新設する。
- ゼミナールの専門分野コードは、四学部共通で「SEM」を使用可とする。
- 現行カリキュラムの科目で、2022 年度カリキュラムに対応する科目については、ナンバリングを2022 年度カリキュラムに合わせて上書きする。そのため、「難易度レベル(履修年次)コード」、「授業種類番号」「シリアル番号」等について、現行カリキュラムに基づいたナンバリングコードと異なる可能性がある。学生にそのことを告知する。
- 現行カリキュラムで廃止される科目については、見直しはおこなわない。

3. カリキュラム・マトリックス

カリキュラム・マトリックスとは、本学のディプロマ・ポリシーで示す学生に身につけてほしい知識・能力・態度を整理し、それらがどの科目と結びついているかを示した表である。学生はカリキュラム・マトリックスを参照することで、各学部学科のカリキュラムのなかで、それぞれの科目がどのように位置づけられているのかを理解することができ、履修計画を立てる際も活用することができる。

2022年度カリキュラムにおけるカリキュラム・マトリックスの方針は、2021年1月の教務部委員会で、次のとおり定められた。

- 「○」の数は1科目あたり3つ程度(多くても5つ以内)を目安とする。
- ゼミナールや卒業論文等、総合的な評価を行う科目は個数の目安の対象外とし、授業の特性をふまえ、適切に「○」をつける。
- 「○」が多く付く科目については、「○」と「◎」をつけて重要度を示すことができる。
- 2022年度カリキュラムにおけるディプロマ・ポリシーは、現行カリキュラムからほとんど変更されない見込みである。カリキュラム・マトリックスの「大学／学部の DP に対応した育成する能力」も、2022年度カリキュラムと現行カリキュラムで共通となる。したがって、2022年度カリキュラムに対応している現行カリキュラム科目については、2022年度カリキュラムのカリキュラム・マトリックスに上書きする。
- 現行カリキュラムで廃止される科目については、見直しはおこなわない。

● 初年次教育の見直し

かねてより、初年次ゼミナールは学部または学科単位で、授業およびシラバス内容を統一することで調整を進めてきた。シラバス内容の統一が未完了であった学部・学科のうち、経済学科については、2021年度開講の「教養ゼミナール」より統一シラバスとすることが決定した。人文学部の三学科については、2021年度中に各学科で検討をおこない、2022年度開講の初年次ゼミナールから統一シラバスとする準備を進めることが確認された。

また、新学部で予定している初年次教育についても、2020年11月に内容の確認を行った。経済経営学専攻では、初年次に全所属学生が履修する授業科目で、文献調査の方法・レポートの書き方等、大学における学びについて必ず扱うことが確認された。グローバルスタディーズ専攻では、初年次ゼミナールが設置されることと、そのゼミナールについては他学部や経済経営学専攻と同様の内容を含む統一シラバスとなる予定であることが確認された。